



信楽壺 2020 谷 穹

リエゾン liaison

谷 穹 Tani Q | 桑野聖子 Seiko Kuwano

2020年10月18日(日) - 11月15日(日)

11:00 - 17:00

谷穹(b.1977)は、祖父・谷清右衛門のもとに信楽に生まれました。

成安造形大学立体造形クラス卒業後、彫刻家中ハシクシゲ氏のアシスタントとして海外で研修を積み、その後、清右衛門陶房において、中世・室町時代に作られた古信楽の探求のもとに作品を制作してきました。双胴式穴窯(2007)、単室式穴窯(2012)を築窯し、2015年にはイッテコイ窯を完成させています。

不完全に歪んだり欠けたりしているものに美を見出した「見立て」。意図して作られたものでなく、意図せずに出来上がった偶然の美を見極めた茶人の審美眼。室町時代から安土桃山時代、茶人や時の為政者らによって、日本独自の美意識は培われてゆきました。

谷穹は、古信楽を追い求めるうちに、世阿弥周辺の特権的な人々だけでなく、「古信楽」を生んだ陶工や農民にも、日本独自の幽玄思想が確実に根付いていたことを確信します。

伝世の古美術品を引用した「写し」。コンセプチュアルな思考の器としての「オブジェ陶」。陶芸を用いた現代美術の手法は、近年限りなく多様化しています。さまざまな声色を使い分けたり、前衛陶芸に見られるハプニングの発見など、陶芸と現代オブジェの越境の試みは多岐にわたって行われています。

こうしたムーブメントの中にあって、谷穹は異次元の場に佇んでいます。近年来取り組んできた、古信楽の幽玄思想に迫る探求も爽やかに乗り越えたかのように、谷穹はひたすら壺の内側に向かっていきます。

それは、壺の内面に奥深く入り込み、空間に存在する「気配の纏わり」を追いかけながら、日本独自の精神性を探る試みとあって良いでしょう。

谷 穹

Profile 略歴

- 1977年 谷清右衛門を祖父として滋賀に生まれる。
2000年 成安造形大学立体造形クラス卒業後、彫刻家中ハシクシゲ氏のアシスタントとして国内外の展覧会に同行。
2001年 北村寿三氏にロクロの指導を受ける。その後、家業の清右衛門陶房に入る。
2007年 中世の信楽に多く見られる双胴式穴窯を築窯。2012年現在の単室式穴窯築窯、2015年イッテコイ窯築窯。

Selected exhibition 主な展覧会

- 2020 「健在する日本の陶芸 一不如意の先へー」 益子陶芸美術館（栃木）
2019 「火色」 十碗十壺+ONE／翫粹（京都）
「Air」／NOTA_SHOP（滋賀）
2018 「守破離」／堀尾貞治×越野潤×谷穹／ギャラリーあしやシューレ（兵庫）
「黒 罎」 十碗十壺+ONE／翫粹（京都）
2017 「泥仲間」／中ハシクシゲ×谷穹／ギャラリーあしやシューレ（兵庫）
「信楽 風景」 十碗十碗+ONE／翫粹（京都）
「器詩酒」／wad+（大阪）
2016 「ロローロロ」／ギャラリーあしやシューレ（兵庫）
2015 「LAND e SCAPe」／ギャラリーパルク（京都）
「これからの、未来の途中ー美術・工芸・デザインの新鋭II 人展」／京都工芸繊維大学美術工芸資料館（京都）
「93.未来の途中の先を夢見る」／ARTZONE（京都）
「ロローロロ」／京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA（京都）
2013 「LAND e SCAPe」／滋賀県陶芸の森 陶芸館ギャラリー（滋賀）
2007 キュレーターズアイ 2007 「LAND Re SCAPe」／正木裕介×谷穹／ギャラリーマロニエ（京都）
2006 「LAND e SCAPe」／成安造形大学ギャラリーアートサイト（滋賀）

Collection コレクション

- 2014 ≪信楽大壺≫(2014年制作)ポートランド美術館（アメリカ）



「ロローロロ」／京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA 2015



「守破離-マルセル・デュシャンへのオマージュ-」／ギャラリーあしやシューレ 2018

アーティストコメント<谷穹>

2014年

そこはたしかな境界線だった

その先には長い長い 長い道があり
私はその一端に立った
西の果てにつながる乾いた道
南方を廻り東の彼岸を経由する円環の湿った道
やきものにはそれぞれの道程がアップロードされる

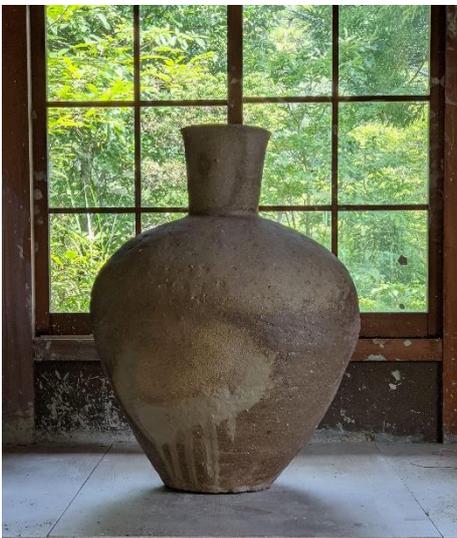
中世日本の技術に出会った時
そこに美意識が存在した事を確信した
やきものに偶然はない
室町期の信楽が幽玄を体現させるための技術とするならば
私は今の言葉を見つける必要がある
それはきっとその瞬間の音のようなものだ
壺が気配を蓄え
ばやけて捉えられない様な感覚をもつためには
そのための技術が必要となる

例えば
意識の方向性
保有する空間や与えられる動作
時間を越える事
心地のよい違和感
向いている方角
内側と外側の境目
演者の素質

それらが転回し見えなかった事に気がつきだすと
演目のように時間が流れる

壺から空間がはじまる時
壺はダンサーにもなれる

そして壺は常に人の内側に在る
これらは今ここに在り今ここにはない



信楽壺 2020



@HANA SAWADA

桑野聖子

Profile 略歴

1980年大阪に生まれる。2003年成安造形大学造形美術科立体造形クラス卒業。

在学中よりパフォーマンス要素を含むインスタレーション形式で作品を発表。

2010年より、ダンスカンパニーEnsemble Sonne（神戸）において舞台美術アシスタント、ダンサーで参加。

2017年より、美術とダンスの実験企画「7×7実験空間」を継続して開催している。

2018年 ギャラリー空間でパフォーマンスを続ける「おどりに ちかい [進行形/内/外]」（セイアンアーツ アテンション||plaing BODY plaer展）を発表。

アーティストコメント<桑野聖子>

空間の中にもものがある

それは動き続けている

それは動き続けてかたちになる。

運動としての動きではないこと、動きの動機（起点）に向き合うこと

そこにあるもの

そこに見えるものは何か、問い続ける。

<本展に関するお問合せ>

GALERIE ASHIYA SCHULE

〒659-0016 兵庫県芦屋市親王塚町3-11 0797-20-6629

mail : info@ashiyaschule.com / galerieashiyaschule@gmail.com

web: <http://www.ashiyaschule.com>